



うるま市 地名散歩 ②②

名嘉山 兼宏

かでかる 嘉手苜 (カディカル)

嘉手苜の今昔

嘉手苜は、うるま市の西、伊波と山城との間に位置する。『琉球国高究帳』には「伊覇村・かでかる村」と併記され、『琉球国由来記』には「嘉手苜村」となっている。

集落の西方にはカルスト台地が広がる。そこにはメーヌテラ、ナカヌテラ、クシヌテラと呼ばれる洞穴（ガマ）がある。メーヌテラは、地元ではガマデラ、他地域からはクラシンガーと呼ばれるときもある。このガマは、今帰仁城主の遺児が、戦に敗れ、一時身を隠したところで、後に伊波城主になったとの伝承がある。また、このガマは去る大戦のときに多くの付近住民が避難し、今では「ヌチシヌジガマ」として知られる。小さな片田舎の村であるが越来城と伊波城との関係からか歴史的には王府

とのつながりが深い人物が出ている。『石川市史』によれば、尚質王側室の諸見里阿護母子良札や尚質王の乳母（奥間大あむしられ）、また中城王子尚純の御側役などが出ている。

嘉手苜村として成立する前は伊波に所属していたが後に分村、王国時代には越来間切、美里間切、明治41年には美里村、去る大戦後は石川市、そして平成17年の二市二町の合併により「うるま市石川字嘉手苜」となった。行政は隣の伊波や山城と同様の歩みをしたっている。

近年、集落上方からは高速道路が通り、近くはバイパスが開通し、県道6号沿いにガソリンスタンド・修理工場・酒造業などの企業や保育園などが立地し、生活圏が拡大しつつある。

県内の嘉手苜地名

沖縄県内には嘉手苜地名が本市をはじめ、西原町・久米島町・宮古島市に分布し、かつて名護市にも「かでかる村」があった。小字地名としても数か所存在する。久米島の嘉手苜は、中央南側に位置し、東シナ海に面する。白瀬川の河口から上流に沿って、島で一番高い宇江城岳へと丘陵がつづく。その白瀬川の河口付近の東側に海岸平野

が広がるが、嘉手苜はその砂丘上に位置する。

宮古島市の嘉手苜は、南西に深い入江湾がある。この湾は、往時には宮古島南部の交易の拠点として繁栄していたといわれる。宮古島は概して平坦な島であるが、嘉手苜は琉球石灰岩の段丘上に立地する。

西原町の嘉手苜は、町の東部にあり、交通の便に恵まれ、町役場や議会議務局、教育委員会などの公共機関の庁舎をはじめ、学校、各種企業、商店などの建物が集中し、町の中心となっている。集落発祥の地は、北側の御嶽毛、上又松毛の丘陵一帯だと伝えられている。上又松毛は現在その形跡はとどめないが、この一帯は住宅が建ち広がり内間や掛保久との境界が判別し難くなっている。

その他嘉手苜地名は小字として県内各地に散見されるが、名護市の小字嘉手苜は、汀間川左岸の丘陵麓に位置する。これらのことから嘉手苜という地名は、丘陵地、あるいはその付近に付けられる地名ということが出来る。地名用語からして「カデ・カディ」、「カル・カリ」は丘陵地を意味する。「かでかる」は同義反復の地名と考えられる。すると嘉手苜は「丘陵地にあるところ」という意味になる。また県内の嘉

手納、勘手納などもこの系統の地名ではないかと類推される。

嘉手苜観音堂

東恩納から県道6号を仲泊へ向け、伊波のバイパス交差点を過ぎるとすぐ嘉手苜入り口にさしかかる。その右手の嘉手苜バス停の奥に木々に囲まれてひっそりと佇んでいる赤瓦の小さな御堂がある。嘉手苜観音堂である。時折、安産や子孫繁盛の祈願に県内各地から参拝者が訪れる。



【嘉手苜観音堂】

この観音堂は、五代目伊波按司のときに日秀上人によって建てられたという。当初伊波城の西方にあったが、何度かの火災にあつて現在地に移されたと伝わる。日秀上人は金武観音寺をはじめ、琉球八社を建てた人として知られる。御堂の中には戦前までは「邦海濟宏」（沖縄をひろく救う）という扁額が掲げられていたということが入り口の案内板にある。